
柊館の殺人

まめ太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

柊館の殺人

【Nコード】

N4534W

【作者名】

まめ太

【あらすじ】

悪魔と少女がガチ探偵。

プロローグ

「うーん、相変わらずオテナントウさんはヒリヒリしやがるぜ……」
少女の肩に乗った、黒い動物がそう呟いた。

猿のように二本足で立ち、両手は器用に動いている。

背中にはコウモリのような翼が生えており、時折、ぱたりと揺れた。

およそ、空を飛ぶにはお粗末と映る小さな翼と、ずんぐりとした頭。

少女は常から、昔見た映画のグレムリンのようだ、と思っている。その姿は紛れもなく、宗教画でいうところの「悪魔」だった。

少女の頭を肘掛け代わりに、悪魔は日差し避けのサングラスを指先でチヨイ、と直す。

見渡す限りの銀世界。

開けた平野部も、遠い山岳も、あまねく雪に覆われた景色が広がる。

その雪景色の白さにも負けぬほどに白いコートを着て、少女がぽつんと立っている。

女学校の制服のようないでたち、だがこれは彼女の私服だ。

白を基調にしたブレザーのライン部分は水色で、胸元には赤い大きなリボンがふわりと結ばれている。

大きなひだが付けられたスカートの丈は短く、ハイソックスの足元は寒々しい。

白いくつしたには黒猫のワンポイントが付いていた。

可愛い制服風のファッションが、最近の流行だという。

おかつぱに近いショートボブの髪型は、サイドが長く、後ろ頭は刈り上げに近い。

少女もまた、ぱっちりとした大きな目が小動物を思わせた。

「由香ー、」

彼女を呼ぶ声が背後から聞こえ、少女は振り返った。

そこには母親の姿と、雑木林を背に建つ古い洋館が彼女の視界いっぱい広がる。

前面には開けた平原、背後には雑木林と山の斜面。

そんなロケーションの古ぼけた温泉旅館。

「お父さんが待つてるわよ、早く入りなさい。」

外へ出たまま戻らない娘を心配して、様子を見に来たようだった。

「あ、ごめん。すぐ行くね。えいっ！」

「？」

可愛らしい仕種で首をすくめ、同時にくるりと踵を返して、平原に向かって何かを放り投げた。

母親には見えなかったが、投げられた悪魔が雪の上をころころと転がっていく。

平原は少しばかりゆくと急傾斜がついているらしい。バウンドして、すぐに落下して消えた。

「さむい、早くお風呂入ろっ、」

「小娘　　！！」

悪魔の怒号。

母親には聞こえず、少女、由香は無視した。

洋館の中へ進むと、すぐにロビーがあり、赤い絨毯が敷き詰められている。

元は明るい色調だったのだろう絨毯の赤は、エンジに変わり、過ぎた年数を感じさせる。

由香の家族以外に客らしい姿はなく、ロビーの隣に見える喫茶コーナーにも人は居ないようだった。

時折、従業員が足早に通り過ぎてゆく。

来た時にも見かけた顔ばかりだ。従業員も少ないのだろう。

明治期に建てられた個人の邸宅だったものを、後の所有者が旅館に改築したそうだから、さほど大きな建物でもなく、客室も少なく、人手もさほど掛からないらしい。

家族経営に近い、静かな旅館。

「由香、勝手に居なくなったら駄目だろう。部屋も解からないのに、どうするんだ？」

先ほどまでチェックインの手続きを行っていた父親が、フロントを離れ、ロビーのソファに座って待っていた。

絨毯同様にソファも十分にくたびれている。

町内会の福引で当てた景品の旅行など、こんなものだろう、と由香の父は最初の感想でそう言っていた。

なにが「こんなもの」だったのかは、すぐに由香も理解した。

歴史を感じさせると言えば聞こえはいいが、実際の風情は単なる古びた洋館という感じ。

手入れはされているようで、柱や床の板張りは磨かれて黒く光っていたが。

先に案内された温泉は、この洋館が建てられて十数年後に立て増しされたものと説明された。

こちらでも年数が経っており、今では本館との違いなど見つけようもないほど古びている。

それでも、こちらもやはり、本館同様に手入れは非常に行き届いたものだった。

次に案内された客室でも、家族の感想はほぼ同じ。古びてはいるが、手入れは行き届いている、だ。

およそ満足げに頷いて、由香の父は座敷に上がった。

案内してきた仲居の女が、すばやく父の靴を揃え、設えの靴箱へと仕舞う。

「お客様、お部屋はどうです？ お気に召しましたか？」

人懐こい喋り口調の中年女性で、胸の名札には「吉田」と書かれてある。

質素な和服、ふくよかな体型、人懐こい笑顔。仲居さん、というイメージそのものの女。

すぐに母との他愛のない会話が始まった。

ノスタルジーのなんたるか、などが好みの人間にとっては、堪らないホテルだろうか。

由香は窓の外へ目を移す。

「お食事はこちらでご利用致しますか、それとも下の食堂へお行きになりますか？」

吉田と母の会話は今夜の食事の支度へと移ったようだった。

ご馳走が出ればいいな、と考えながら由香は白い景色に目をやった。

三階から見えた外の風景は、雪をかぶった雑木林の木々と溪谷に沿う大小の岩と水の流れ。

温泉をすっぽりと覆う巨大なガラス張りの建屋が片隅に見える。

白く筋を曳いたような道は遊歩道だろうか。

窓ガラスの外に、さっきの悪魔が張り付いていたが、由香は知らん顔で景色を眺めていた。

とんとん、窓ガラスをノックしても少女が無視を決め込んでいるため、悪魔はするりとガラスを通り抜けた。

そして少女の後ろから、おかつぱ頭を蹴り飛ばした。

「いったーい、なにすんのよう、」

両親に感ずかれないように小さな声での抗議。

「何もくそもあるか！ テメーがやった事の仕返しに決まってるうが！」

よくもヒトを投げ捨ててくれたな、だのなんだのと、悪魔はわめき倒している。

その間中、由香は悪魔の足蹴にされた。

げしげし。その様子に両親が気づいたなら我が子の正気を疑っただろうが、悪魔の能力で二人は今、他人からはまったく意識されない存在と化している。

思えばこの悪魔と知り合った事も、悪魔からすれば想定範囲外だったに違いないと思う。

注目されるはずのない存在を、しっかりと感じ取っていた少女。

早朝、寂れた喫茶店にはそれだけでなくとも客が少なく、悪巧みの相談で膝を突き合わせていた悪魔2匹をじっと見つめていた少女は彼らとばつちり視線を合わせた。

その時は、この黒いケモノは人間の姿だった。

モデルだろうか、芸能人だろうか、と胸を躍らせていた自分が馬鹿みたいだ、と足蹴にされながら由香は溜息をつく。

登校途中、何気に立ち寄ってモーニングを頼んだことが彼女の不幸の始まりだった。

「……見えてるね。」

「見えてるな。」

慌てて視線を外した少女に対して、二人の男たちの続く会話は奇妙だった。

チラチラと、それでも時折盗み見してしまう。

そのくらいには、二人とも人並み外れて美男だった。

そう、人並み外れて。

一人は薄いピンクのシャツを着て、ふわりとしたロングの髪を指先でよく弄くっていた。

由香は勝手にオネエ系の人と決め付けていた。

もう一人は黒ずくめの衣装で、大きな、血の色をした赤いピアスが印象深かった。

由香が大好きなアーティストによく似ていて、本人かも知れないという期待で盗み見ていたものだ。

視線が合った時には、胸が高鳴った。が、会話を聞くうちに、だんだんと雲行きが怪しい方向へ……。

通路を隔ててすぐ隣の席で、聞こえるくらいの会話が続く。

「おかしいね。見えるはずないよね。」

「おかしいな。そういう体質だろうな。」

二人の視線はいつまでも無遠慮に注がれ、由香は誤魔化すように珈琲を啜った。

とても居心地が悪く、もう店を出ようかと迷ってすらいた。

「いずれ優秀なエクソシストになるだろうね。」

「いずれなるだろうな。厄介だな。」

体質？ エクソシスト？ 彼らが何を言っているのかは、すぐにピンと来なかった。

だが、次の言葉は由香の動揺を最高潮に押し上げる。

「……消したほうがいいよね。」
口にした珈琲を噴出しそうになった。

ぎよつとした顔のまま、二人を凝視した由香に、オネエな方の男がひらひらと手を振った。

先ほどの会話とは似つかわしくない、爽やかな笑顔。

「……やっぱり見えてやがるな。」

もう一人は横目でじろりと由香を睨んだまま、珈琲カップに口をつけた。

「嫌だ　しつかり聞こえてるみたいだよ。」

手を振って、ついでのようにキスを投げる仕草。

そして、由香は初めて、二人の影には人間にはあるはずのないオマケが付いている事に気付く。

細い角と、大きな羽。

背筋が凍るとはこの時の感覚を言うのだろう、と後になって考えたりする。

由香が悪魔に憑かれたのは、きつとこの瞬間だったろう。

以来、悪魔は執拗に少女に契約を迫っている。

この旅館に来ることになったのも、この悪魔が仕組んだ罠だった。

「……おい、ここから落ちたら一溜まりもないと思わないか？」

「雪が積もってるからわかんないと思う。」

「ちっ、」

小声で、見かけによらず冷静だな、と呟く言葉もしっかりと聞こえた。

母に頼まれた福引は一度限りだった。

まさかそこから特賞の当たり玉が出るなど、どれほどの強運だか知れない。

「当たったね、おめでとぉ。」

「旅行中の不幸はよくある話だな。うん。」

真後ろの悪魔たちの会話が、仕組まれたことだと教えた。

破り捨てた特賞の封筒は、彼女の母親がカバンの中から発見した。

元通りになっていた。

無駄なことだとケモノ姿の悪魔が肩の上で嗤った。

「ごめんねえ、由香ちゃん。ボク、今はちょおつと忙しいんだよね。」

手にしたお菓子を一口齧り、不味かったのか眉を潜めてほうり捨てる。

彼らに遠慮という言葉はないらしく、二人はちゃっかりと由香の家に上がりこんでいた。

その上、オネエな悪魔はあれやこれやと注文が多く、やれ紅茶の淹れ方がなっていないだの、安物のお菓子は美容によくはないだのと、文句ばかりを由香に聞かせる。

由香が出したポテトチップスの袋は、サイドテーブルから放り投げられて、床の上だ。

もう一人はと言えば、もともと人間の姿でいるのが嫌いな様子で、ケモノのような、悪魔本来の姿で部屋を飛び回っていた。本棚の本を引き抜いてはパラパラとページを繰り、これまた適当に放り投げる。

きちんと整理されていた彼女の部屋は、そんな調子でどんどん乱雑になっていった。

文句は言わない。

相手は悪魔だ。人外だ。

下手に逆らったら何をされるか……、そう思うから、由香は気丈なフリを精一杯に演じている。

その態度が、実際に彼女を救ってもいた。

「いい？ 由香ちゃん。よく聞いて。」

少女のベッドをソファ代わりにくつろぎながら、悪魔は話を始める。

「ボクたちは確かに悪魔だけど、いきなり人間を殺したりなんてし

ない。」

「なんの得にもならないからね、と続く。」

「だから、そんなに身構える必要はないんだよ。それどころか、君は超ラッキーさ。」

本来なら、ボクたちを呼び出すだけでも相当な犠牲を払ってもらうところなんだけど、君は特別だよ。タダでいい。グリモアを用意する手間も省いてあげよう。ボクたちと契約するだけ、その身体はどこかに刻印をひとつ受け入れるだけのことさ。痛みすらない。

どう？ …… それだけの事で、ありとあらゆる望みが、君の思うままに叶えられるんだよ？」

悪魔の手に一輪の赤薔薇の蕾。ふわりと投げると由香の膝で大輪の花が開いた。

ゆらりと影が舞う。

大好きなアーティストによく似た顔で、悪魔は彼女を後ろから抱きすくめる。

いつの間に人型に戻ったのかと思う間もなく、耳元で誘う声。

「……君のために、いつでも来てあげよう。」

俺たちを使役する権利を、タダで与えてあげよう。どんな望みも、君の思うままだ。」

だから契約しろ、と二人の悪魔は少女に迫った。

少女、由香は黙ってうなだれ、首を横に振る。

契約すれば、魂を取られることくらいは、彼女も知っていた。

漠然としたイメージだけの事だったが、それは彼女にとって、とても恐ろしい響きを持っていた。

『魂を取られる。』

「契約したら……魂、取られちゃうんでしょ？」

恐る恐る発せられた少女の返答に、悪魔二人の盛大なため息。

「はあ〜。」

「こりゃ、厄介だなあ。どうしよう。」

ベッドへ仰向けにダイブして、オネエな悪魔が身悶える。

いいい〜〜やあ〜〜あ、とか何とか唸る声が聞こえた。

「おい！ いいか、小娘。よく聞け。」

さっきの甘い声音はどこかへなりを潜め、胸倉を掴んできた悪魔に由香は必死に頷き返す。

「ちゃんと聞いてます、と。」

「この際だから教えてやる、お前の力は強すぎるんだよ。」

普通は見えるはずがないモノを、お前は見てしまう。意識しての事じゃないから、俺たちみたいに相当厄介なシロモノほどよく見えるって事だ。俺たちが手を下さなくても、どの道誰かに殺される。早い者勝ちって事だ。

宣言してやってもいい、必ず、お前は殺される。生身を引き裂かれて、否応なしに魂を奪われるんだ。だから、死にたくなかったら大人しく契約しろ。」

俺たちなら、死ぬまでは殺さないと約束してやる。無茶苦茶な条件での取引に由香は半泣きになっていた。

ぱたぱたと、旅館の廊下にスリッパの音が響いている。

「ねえ。……あっさり殺して魂取っちゃえばいいのに、どうしてそうしないの？」

温泉施設へ向かう渡り廊下で、ふと浮かんだ疑問をぶつけてみた。

「もちろん、……死にたくなんかないよ？」

慌てて追加する。

言った後で後悔した、まるで殺していいと言っているようだ、とあれ以来、人型でない時の悪魔は由香の肩を自らの指定席に決めている。

もう一人は別の誰かと契約中だとかで、この旅行には付いてこなかった。

由香の頭を肘掛けにして、悪魔が答える。

「生身を引き裂くと、どうしても魂に傷がつくからな。こっちの事

情ってやつだ、お前たち人間が知る必要なんぞない。……どうして
も契約しないって言うなら、そうせざるを得ないけどな？」

「……モウチヨットダケ考エサセテクダサイ……」

プログラムのように、お決まりの回答を返す。

契約の二文字には、この台詞を寄越すことに決めていた。

「うそぉ……、」

到着した温泉の入り口。

混浴、と染め抜きされた大きな暖簾が掛けられていた。

暖簾の隙間からそつと覗いた限りでは、脱衣所辺りはまだ男女で区切りが成されているらしかった。

一息ついて、中へと歩を進める。

当然とばかりに肩に乗っかっているケモノを、ポイ、と暖簾の向こうへ投げ捨てて。

暖簾を潜ってきたところへさらに追い討ちの洗面器を投げた。

「おい！ 混浴つてあるじゃねーか！ なんだその仕打ち！！」

「こつちは女性専用なの！」

脱衣所には由香以外の人影がない。

安心して大声で返すと、向こうも怒鳴り返してきた。

頭に来たらしい。

「ツルペタンが！ 見られて恥ずかしい程の体かよ！」

由香は無言で洗面器を3つ投げる。

うつ！ がっ！ ごっ！ 悲鳴が3つ続いた。

「も~~~~、なんで入ってくんのよう……」

幸い温泉の湯は乳白色で口元近くまで浸かっていれば、肌は見えない。

黒い悪魔は由香のことなど気にした風もなく、湯を切って泳いでいた。

小さな羽が動くたび、飛沫が由香の顔に容赦なく跳ねる。

「も~~~~……！！」

その時、ふいに背後から声が掛けられた。

「あら、お客様？」

脱衣所の戸が開く音を聞き逃したのだろうか、振り返った先に女

性が立っている。

「え？ あ、はい、スミマセン……、」

こういう時、とりあえず謝ってしまうのが由香の癖だ。

あらわにした裸体を隠そうとする様子もなく、彼女は由香の方へ歩み寄り目の前で立ち止まった。

成長途中の自身と違い、成熟した女性の豊満な肢体に息を呑む。

美しい女性だと素直に感嘆した。

「あら？ 何も謝ることなんてありませんわ。ごめんなさい、わたしの方こそ失礼でしたわ。」

お客様が使つてらっしゃること、確認するべきでしたわね……。」「優雅な仕種とあいまった微笑。本当に美しい女性だった。

隣の悪魔が下品な口笛を吹く。

すかさず由香は悪魔を湯の底へ沈めた。

浴場で親しくなったその女性は嘉代子と名乗った。

この温泉旅館を切り盛りする女将の義妹にあたるのだとか、旅館の離れに住まい、経営にはタッチしていないのだとかの話が聞かされた。元は華族とかいうちょっと自慢出来る家柄なのだとか。

「わたし、甘やかされて育ったんですわね、きつと。義姉の圭子さんには迷惑ばかり……。」「

「そ、そうなんですか？」

正直、由香には何の関係もない話で返答に困ってしまう。

「圭子さんは東京から来られましたのよ。お兄様が、向こうの大学へ行かれて……。」

それで、お知り合いになられたそうですの。」

淡々と話す言葉はあまり抑揚を感じさせず、話の内容を事務的に伝えているような感じがした。

「お兄様は登山が趣味でしたの。」

わたしが小さい頃はよく裏山へ山菜を取りに連れて行ってもらいましたわ。

秀才で、地元の学校では勿体無いからと勧められて、東京へ参られましたのよ。」

かと思えば、今度ははつきりと高揚した調子で身内の自慢をした。お兄さんのこと、大好きなんだろうな……、由香にも簡単に察することが出来るほどの変化だった。

「ああ、嫌だわ、わたしったら……！」

ごめんなさい、由香さん。あんまり長話に付き合わせたら、のぼせてしまいますわね。」

くすくすと笑い、彼女は先に白く濁る湯から身を起こす。

栗色の長い髪がふくよかな胸に張り付き、妙なまめかしさを醸し出す。

同性の裸を見てドキドキする、などというのが、由香には奇妙に感じられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4534w/>

柊館の殺人

2011年10月2日03時34分発行